以上、きわめて概略的だが、いわゆる「帝国」史の構築と関連し、かつ私が関わっている日文研内の諸研究課題について紹介した。言うまでもなく、これらはけっして一人や二人で実現できるものではなく、かならず多くの研究者と一緒に挑戦しなければならない大掛かりなテーマである。そして冒頭に申し上げた大言壮語とは裏腹に、そのいずれもまだすべて道半ばで、今後こそまさに正念場を迎えるところである。本特集の意図する？「日本」研究の真の脱構築はまだまだこれからだと言わざるを得ない。

（国際日本文化研究センター教授）

広く長く、そして深く——外国人研究者とつきあう法

鈴木貞美

三月末に定年退職して三か月経つ。二五年間、なんと慌ただしい日々を送ってきたことか、と我ながら呆れはてている。もちろん、そうでなければ、得られなかったことばかりなので、悔やんでいるわけではない。著作の不足や不備は補いをつけながら、せいぜい、仕上げを楽しんでゆきたい。

本誌の編集長が、海外の研究者とのつきあい方のノウ・ハウを書き遺せという。影の声は、こうささやいている。鈴木はろくに語学もできないのに、どうして年に五回も六回も海外のシ

ンポや集中講義に呼ばれるのか？

そう、わたしは人も知るように語学はまったく苦手。英語のペイパーを読むくらいのことはしてきたが、行きの飛行機のなかで繰り返し練習してのこと。二〇一三年夏、シアトルでは日本語の分からない若い人が多い会場で、質問にも英語で答えなくてはならないハメになり、矢次早に浴びせられる質問に、司会者に手伝ってもらいながら、やっとのことで切り抜けたが、思いもかけず、暖かい拍手に包まれた。

いや、そういえば、かなり以前、オーストラリアでも似たことがあった。東洋系移民の多いところでは、漢語概念の近代化の話はかなりの関心をもって聴いてもらえるのだと納得。よい思い出をひとつ加えることができた、ということにして、この話はおさめよう。

日文研に勤めはじめたとき、海外の研究者で知人と呼べるのは、四、五人しかいなかった。尾崎秀樹氏の大衆文学研究会が北京の中国社会科学院で行ったシンポジウムで顔見知りになった人ばかりである。その一人が劉建輝氏、もうひとりが社会科学院の外国文学研究所の魏大海氏、あとは社会科学院の重鎮クラス。だから、親しくなった海外の研究者のほとんどが、その後、日文研の活動を通して知り合ったことになる。

日文研は海外における日本研究をサポートすることを目的にしてつくられた機関である。所員の任務を学術外交などと考えることは、政治的駆け引きが入りそうで御免蒙る。学術上の「水商売」と心得ていれば間違いはない、というのが、かねての持論である。客人と酒を酌み交わせばよい、などというつもりはない。内外からお客を招き、個別に、また催し物を開くなどしてさまざまに接待するのだから、研究サーヴィスに徹するという意味である。ファースト・フード店の売り子ではないのだから、つくり笑顔はいらない。売り物は資料と議論だけで

充分だ。

まずは、広い意味での研究相談への応接。思いもかけない問題意識をぶつけられ、触発されることも多い。必要な資料の在りか、探索の仕方、便利なトゥール、研究方法、先行研究とその問題点……　関連する最近の研究動向、等々が相談を受けて即座に答えられるわけもない。最近では各種のデータベースもどんどん増えている。適任者を紹介すれば済むなら、それに越したことはない。が、相手が一人前の研究者なら、自分なりの問題意識をもち、方法も身に着けている。日本の先行研究のあらかたも知っている。その上での相談である。こちらも近接領域の専門家に相談し、先方の必要に応じて、提供すべき内容をアレンジする。一緒に資料にあたり、先行研究をめぐって議論することも多い。

たとえば日中間の文化交流なら、比較文化、中国文学文化、日本文学文化研究の各分野にまたがって先行研究があり、しかし、それらの間に互いに議論が行われていないことが、日本の研究者間の盲点になっている。当然なされなければならないことがなされていない。それに類することがいくらでもある。

わたしの場合は、日本近現代の文芸や文化が専門だから、当該時期の適当な総合雑誌や専門雑誌に当たることをよく勧めた。海外の研究者に当該時期の雑誌に目を通す機会はまずないし、そういう訓練も受けていない。自分が課題として取り組む問題の周辺、同時代の背景が手にとるようにわかる、ということがわかる程度までつきあう。そして、文学事典や百科事典類で、今日の日本人の研究者の「常識」を確認し、その項目の執筆者の立場や分析スキームに注目しておく。それだけで文献を読む力をもつ研究者には、既成の「常識」を突破する新しい研究の視野が拓けてくる。あとは、一年間はあっという間に過ぎるということだけアドヴァイス

すればよい。感謝してもらえること請け合いである。

こちらもこの辺の雑誌をあたれば、と見当だけはつくが、もちろん、すべての記事を読んでいるはずもない。読んでいても問題意識が異なれば、またちがう側面が見えてくる。話の過程で、関連する最近の研究動向や注目すべき研究書、研究者にもふれるし、論文も見せあうことになる。関心の近い研究者に声をかけて少人数で議論する場をもうける。長くつづけてきた基礎領域研究「文化論の基礎概念と方法」は、その方式を定例化したものである。あるアメリカの教授は親しい友人や見込みのある院生を何人も寄こした。「知らない研究者でも論文を読んだだけで、あ、日文研の『鈴木道場』に通ったな、とわかりますよ」と言っていた。

若い研究者には、問題設定のしかたから一緒に検討しなくてはならないことが多い。努力の方向がまちがっていたら、どんなに時間をかけてもすべてが無駄になる。日本における各分野の文化研究は、とくに八〇年代から大きく変化してきた。なかにはおかしな通説も横行している。それが先生を通じて院生に刷り込まれている。とても、よい鏡になる。先行研究の問題点や「刷り込み」のおかしさに気づけば、新たな方向が拓ける。久しぶりに出会った人から「あのとき、相談に行っていなければ、まだ麓のあたりでうろうろしていたでしょう」と感謝されるのはうれしい。初対面の研究者から博士論文の行く手が見えなくなっていたとき、鈴木の著作にまとまるきっかけをもらったと言われれば悪い気はしない。

これらすべてが、自分の研究にはねかえる。年に二人か三人とつきあうだけで、五年、一〇年と経てば、自分の視野が格段にひろがり、根拠資料も反証も蓄積される。知見もまるでちがったものになる。

もうひとつある。いくら日本語を話すのが上手な外国人の研究者でも書くとなると別であ

る。厭わずに丁寧に見てあげること。そうすれば、向こうも、こちらの英文を丁寧に見てくれるし、中国語などへの翻訳も引き受けてくれる。相談にも乗ってくれる。ついでに中身の細かいことも議論できるし、こちらも考え直すこともある。「情は他人のためならず」である。この意味、最近、取り違えている人が多いようですが。

それとは別に内外の各種シンポジウムや研究会がある。オーディエンスは、ほとんどが大学院生以上だから、学部学生相手のような中身では話にならない。かといって、専門の話なら専門の学会でやればよい。日文研が国際性、学際性を表看板に掲げる以上、「興業」には異種格闘技のリングを張ることになる。そこでの議論の面白さを味わってもらうことが出来れば、あそこは一味ちがうと自ずと人は集まる。国際巡業も長続きする。異種格闘技のリングで闘わされる議論は、結局のところ、そのテーマの文化史的背景を巡るものになることが多い。第二次世界大戦後には国際的に学問諸領域に構造主義記号論がひろがり、歴史的変化の研究が手薄になった。その反動で、このところ、各領域の細部の歴史を調べることが盛んになっている。どんなに新しい資料を掘り起こしても、そして、これまで言われてきたことと異なることを資料が告げていても、それを分析するスキームがありきたりなら、ありきたりの結論しか導きだせない。そこで問題は、概念や研究方法、分析スキームの地域的歴史的な相対化をはかることになる。

たとえば先日、日本近代文学会で留学生からパネル発表を見てほしいといわれて出ていった。戦争期の植民地などの文学者の作品や言論と取り組む研究を並べたもので題材はみな面白かった。ところが、みな判を押したように戦争に対する「協力」と「抵抗」の組み合わせ具合を論じていた。この一〇年以上続いている傾向で、彼女たちの先生の顔まで見えるようだっ

た。一時期の断罪的な研究よりよほどマシだが、なぜ、「協力」と「抵抗」が交錯するのか、に踏み込めない。なぜなら、日本が「東亜新秩序」や「大東亜共栄圏」の旗を掲げていたことに対するリアクションという分析視角を欠いているからだ。日本帝国主義という本質規定と、時々刻々変化する国際情勢のなかで日本政府がとった政策、それとも整合しない軍の動きなどの諸問題が、整理できていない。文学に限らず、留学生に限らず、戦争期の研究は盛んだが、「軍国主義」も「ファシズム」も、概念規定すら出来ないまま、ほとんどムード的に用いられてきた。総力戦体制づくりに入った一九三八年九月から「軍国主義」と規定するのか、それとも東条英機が軍服を着たまま内閣総理大臣の椅子に座ったときからをいうのか。

どちらかに決めろ、というのでなく、定義①、定義②としてもよい。第二次大戦後の日本における論議が、すでに二項対立的だった。その後、一九八〇年代以降、今日までの議論は、竹内好「近代の超克」（一九五九）が提起した種々の問題さえ踏まえない。福沢諭吉が一万円札に刷り込まれたころから、「明治以来の脱亜入欧」などということばを刷り込まれて帰国し、学生に刷り込む人が多くなった。そんな歴史認識からは、もう、このあたりで抜け出るべきではないか。

これは、もちろん、ほんの一例にすぎない。外国人の研究者からの質問に精確に答えきれない自分、国際シンポジウムや共同研究の場で飛び交う、まるでかみあわない議論に嫌気がさしている自分、そういうモヤモヤを吹っ切るために、概念構成とその再編の研究をはじめたのだった。「文学」関連だけでなく、「生命」も「エネルギー」も、少しずつでも進めていけば、海外から有力な協力者が出てくる。ワークショップやシンポジウムも開かれる。そこでは剛速球も回転のかかったサーヴィスもいらない。相手コートに深く打ち返すラリーを息長く続けら

れる力だけが問われる。わたしはサーヴィス合戦からは離脱したが、ラリーにはまだ応じている。

外国の日本研究者と広く長く、そして深くつきあいたいなら、彼女らや彼らを研究仲間として心底必要とし、そして彼女らや彼らに必要とされる研究をすること、それにつきると思う。

（国際日本文化研究センター名誉教授）

文明史研究における外書コレクション
――日本資料専門家欧州協会二〇一二年会議を振り返って

フレデリック・クレインス

二〇一二年九月一八～二二日に日本資料専門家欧州協会（EAJRS）のベルリン大会に資料課の辰野直子資料管理係長と共に参加した。私にとっては三度目の参加であった。日本資料専門家欧州協会は一九八八年に設立され、職業として日本の資料に携わるヨーロッパの図書館司書・学芸員・学者からなる学会であると位置づけられる。毎年、ヨーロッパのいずれかの都市で会議が開催されている。ヨーロッパ人だけでなく、日本人やアメリカ人の参加者も多い。協会設立の契機はパソコン技術の向上およびインターネットの出現であった。これらの道具を使って、日本資料の目録化やデータベース作成における国際協力が技術的に可能となった。そ